

【下関市総合教育会議議事録】

令和5年度第1回下関市総合教育会議

開催日時	令和5年8月4日（金） 14:30～16:10
開催場所	下関市役所本庁舎西棟5階大会議室
出席委員の氏名	前田 晋太郎（市長） 磯部 芳規（教育長） 小田 耕一（教育長職務代理者） 吉村 邦彦（教育委員） 佐々木 猛（教育委員） 畚野 美香子（教育委員）
欠席委員の氏名	欠席なし
委員、関係者及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名	総合政策部長 前田 一城 教育部長 藤田 信夫 こども未来部次長 野坂 隆夫 財政部次長 藤永 真一 保健部次長 和田 英一 学校教育専門監 木下 満明 教育政策課長 門田 重雄 学校教育課長 大坪 勇一 教育指導監（生徒指導推進室長）中尾 琢磨 教育研修課長 浦野 建太 学校支援課長 平本 万佐生 教育部参事（学校保健給食課長） 山本 泰造 生涯学習課長 岡部 勇人 教育政策課長補佐 倉前 啓介 教育政策課主任 吉富 守夫
傍聴人の数	1名

次第（目次）

【開会の宣告】	P 3
【市長挨拶】	P 3
【教育長挨拶】	P 3
【協議・調整事項】	
(1) 「下関の学校教育」	P 3
(2) 「不登校対策」	P 8
【その他】	P 1 7
【閉会の宣告】	P 1 9

【開会の宣告】

藤田信夫（教育部長）

ただいまから、令和5年度第1回下関市総合教育会議を開催いたします。
初めに、総合教育会議の主催者であります、前田市長に開会の挨拶をお願いいたします。

【市長挨拶】

前田晋太郎（市長）

令和5年度第1回下関市総合教育会議にご参集いただき、ありがとうございます。
皆様には平素から本市教育行政の推進にご尽力いただき、心より感謝申し上げます。
新型コロナウイルスが5類に移行して初めての夏休みを子供たちは過ごしていると思います。感染状況について、油断はできませんが、生活状況は以前に戻りつつあります。ぜひ、この夏休みにいろいろな体験をして欲しいと思います。
さて、令和5年度、磯部教育長、畚野委員が新たに就任されまして、初めての総合教育会議となります。本日の協議事項は「下関の学校教育」「不登校対策」となります。
まず、「下関の学校教育」ということで、磯部教育長の思いをじっくり聞いてみたいと思います。プレッシャーをかけるわけではありませんので、のびのびとお願いします。
次の議題「不登校対策」については、学校に行くことができない、不登校の子供たちが増加していると聞いています。本日は教育委員の皆さんと意見を交わし、この課題が解消し、希望の街・下関の実現に向けて、より一層前に進めていけるよう協議してまいりたいと思います。
本日は、よろしく願いいたします。

藤田信夫（教育部長）

前田市長、ありがとうございます。続きまして、教育委員会を代表して、磯部教育長に挨拶をお願いいたします。

【教育長挨拶】

磯部芳規（教育長）

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。
今年度第1回の総合教育会議が開催されます。本日の総合教育会議は、私にとっても教育長として、初めての総合教育会議でございます。教育委員会においては、「夢への挑戦 生き抜く力 胸に誇りと志～学びが好きな子ども 学びの街・下関～」の教育理念のもと、教育委員会一丸となって、下関教育の推進・充実に取り組んでまいり所存です。
さて、本日の協議・調整事項ですが、まず私の学校教育に対する思いを皆さんにお伝えしたいと考えています。そして「不登校対策」ですが、これは、私が教育長として取り組みたい重点項目の一つです。
総合教育会議において、前田市長、教育委員の皆さんと意見交換を行い、これからの下関の教育を前進させる、大変有意義なものになると期待しております。
どうか前田市長におかれましては、今後とも格別なご理解とご協力をお願いしたいと思います。本日はよろしく願いいたします。

藤田信夫（教育部長）

ありがとうございます。それでは協議・調整事項に入らせていただきます。
これより、議事の進行は前田市長をお願いいたします。

【協議・調整事項】

「下関の学校教育」

前田晋太郎（市長）

それでは、協議・調整事項に入ります。
まず、「下関の学校教育」ということで、改めて磯部教育長が目指す「学校はわくわくする場所」

についてお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

磯部芳規（教育長）

では失礼いたします。座って説明をさせていただきます。

まずは表紙でございますが、ここに私のすべての思いが書かれてありますので資料はあまり必要ないのかもしれませんが。

まず私は、下関から教育の風を吹かすことができるか、これを始めに言おうかどうか迷っておりました。私は下関で生まれ、下関で育ちました。思い起こしてくると、下関というのは、例えば私の友達を見ても、いろいろな友達があります。すぐ近くの韓国から来た友達もいるし、中国から来た友達もいます。いろんな国の方が来て、小さいときから一緒に育ち、そして一緒に学んできました。まさしく下関というのは、いろいろな国の方が来て、普通に、一緒に学んでいる街ではないかなと思っています。要は、世界から日本というのは注目されています。インクルーシブ教育という言葉で注目されていますが、下関はそういったいろいろな国から来た子供たちも、また、多少経済的に厳しい子供たちも、またゆとりのある子供たちも、街の人が支えて、そして困っている人も支えながらやっけている街ではないかなというふうに、温かい街であると思っています。

従いまして、下関から教育の風を吹かすことができるかというよりも、下関の良さを、ぜひ、たくさんの方の日本の、世界の方に知ってもらおうことが、素晴らしいことに繋がるんじゃないかなという思いです。

そして、テーマですが、「わくわくする魅力ある学校づくり」を掲げています。そういう素敵な街、下関の教育ですが、私は小さい頃から下関でわくわくして生活をしました。

思い起こすと、私は、大学は関東へ出ておりましたので、関東の方の会社に就職することも決まっていたと思います。しかし、関門海峡の眺めを大学3年生の時にふっと見た時に、なぜか理由もなく下関に帰ろうと思いました。これが下関の素敵な魅力ではないかなと思っています。

ということで、これは逆にわくわくしない学校ってあるんだろうかというふうに思っております。わくわくする魅力ある学校づくりは基本だろうと思っていますので、これをもう一度再確認するというつもりでいます。そして、それを確認するには私が大好きな下関の教育理念であります。「夢への挑戦 生き抜く力 胸に誇りと志」、この理念がすべてに繋がっていくのではないかなというふうな気持ちで今考えているところでございます。

次の資料でございます。ここに大体的な内容が書いてあります。では、私ができることは何だろうかというふうに考えています。

先ほど言いましたように下関は今も昔も本当にインクルーシブ教育がある。夢を叶えることができる街であると思っております。今の世の中は見えない不安、見えない不安、何がどうなるかわからないといった不安の中で生活していますので、時々揺らいでいることがあるのではないかなと思えます。そのために若者たちがたくさん外に出ていくんじゃないか。また、そういったことがひょっとしたら下関教育に少し影を落としてるんじゃないかなというふうな気持ちも持っています。

幸いなことに先日の教育委員会の定例会で下関の教育は、計画的に進んでるということは報告を聞いておりますが、もう一度ここを考えたいと思っています。

そういう中で私は自分の特技を使って、下関でできるっていうことを証明したいなというふうなことを思っていました。そのこともできたら、皆さんに伝えていきたいなと思っています。例を挙げますと、山口国体と書いてますが、私は山口国体の前まで47位をずっと続けた、山口県の陸上競技の監督を引き受けました。山口国体開催まであと5年に迫ったときに、当時の二井知事が、「僕は名前は二井だけど一位がいいな」ということを聞いて、その言葉だけで監督を受けました。まずはそういうふうな位置におりますので、すべての高等学校の先生と中学校の先生が逃げてきましたので、本当独りぼっちになりました。その中で自分の教えた子供たちと逆に自分の教える子供たちだけに、2012年開催の東京と勝負するわけです。東京ですからすべての大学すべての企業が集まる、そういうオリンピック選手が集まるチームと戦う、そして勝つことを目的とする。これは自分にとって一番良い経験となりました。おかげさまで勝つことができました。日本選手権もこれも山口県の選手で、この山口の地で頑張るといふのがあるということで、これも狙っていくということでございます。できました。

さらに、学校経営ですがこれはコロナです。コロナの中で日本のすべての学校が、考えたことはやはり縮小や中止です。その中で取り組んだことが、たまたまテレビのNHKなんかでも取り上げていただきましたので、こういったことを通じて、先生方、また生徒に伝えることで、今私達にないものはなんだろう、逆にあるものは何だろうか再確認していきたいと思っています。下関にはできるという情報・環境・理論がそろっていると思います。

では何がないかという、教育理念にしっかり向き合うことかもしれないなというふうな気持ちで

おりますので、そのことを伝えていきたいなというふうに思います。最終的に私は教育の使命というのは、人材育成であるというふうにも考えています。ここにすべて考えていきたいなと思います。

人材育成のためには、視点があります。ここも下関教育でもう一度確認して欲しいなと思うのは、いろいろ問題が学校で起きているので、ちょっと見失っている点があると思います。

それは子供を真ん中において、学校というのは本当に一生懸命取り組んでいます、子供から見える景色をどれだけ考えているかということが今、私たちに問われるんじゃないかなと思います。そういうことをしないと、今、学校は生徒が学校を選択しているような気がいたします。

当然選択していない生徒も増えますので、そういったものがこれからの話題になります不登校にも繋がってくるんじゃないかなというふうに思っています。

そういうことを考えますと、今からの下関教育は、インクルーシブ教育に力点を置いていくということになると思います。

障害がある子供、障害がない子供、経済的に恵まれていてもいなくても、みんなが認め合って、そして助け合っていく、そういう教育を進めていく、ここに力点を置いていきたいなというふうに思っております。

わくわくする学校づくりですが、好きな言葉が一つあります。これは、Society 5.0、平成30年の答申の中の言葉でございます。「いろいろ課題があるんですが、今打てる手は何かを考えること。そして今打てる手というのは、いたずらに不安を煽ることではなく、どのような時代が訪れようとしているのか、具体的に考察し、今打てる手は何かを考える」。私はこの答申を見たときに、これは素敵だなあと思って、今も心の中に置いています。今から下関の課題にこの言葉をしっかりと残していきたいというふうに思っています。

そこで下関の現状のご説明をします。初めにも言いましたが、下関の学力、心力、体力、これは知・徳・体です。あえて学力・心力・体力と書きましたが、知・徳・体です。

日本の教育はご存知のとおり、知・徳・体を一体化して、バランスよく鍛えていくのが、日本型の学校教育でした。しかし昨今だんだんこれが揺らいできています。

例えば体のところのスポーツでは、学校が補うんじゃなくて地域が補うじゃないかというふうな考え方が進んできてますので、部活動の地域移行が出てきております。

また、徳については、日本は道徳を中心にやってきましたけども、世界の方は例えば教会だとかそういうところでやります。ということで、今、日本型教育も少し揺らいできているような気がします。

ここでもう一度、下関の日本型学校教育というものを考えていきたいというふうに思います。それには、右側の資料にも載せていますが、知・徳・体のそれぞれのデータはしっかり出してほしいと思います。

見えないものに対して見えるものをしっかり使っていきたい。そういった時にどうなるかというところ、学力の方、全学調テストの結果が出たばかりであり、報告するのが怖い状況ではあります、しかし、頑張っています。かなり頑張っております。

それから、徳の方、これは不登校の問題。これは後で考えます。体力の面、これも厳しい結果が出ております。こういったことを考えていきます。

ただし先ほども言いましたが教育委員会の評価報告書の中では、計画はしっかりと進んでいるということでございます。従って、その中でも見えない不安があるということでございます。さらにじゃあどうやっていかっていかってことはこれはもう全国の方でも取り上げていますが、学びの多様化である。個別最適な学びと協働的な学び、これが日本では必要だというふうに言われております。下関でも取り組んでいきます。

先ほど言いましたように下関は温かい街です。従って、下関には多様性を認めたり、優しい、温かいインクルーシブ教育が求められると書いてますが、これが下関の特徴ですので、これを進めていきます。これほど、街の人が温かい、そして優しい街はないと私は思っていますので、これを下関の市民の皆さんに、もう一度、しっかりと宣伝してやっていきたいなと思います。

その中で、「わくわくする魅力ある学校づくりを地域の皆さんと作っていく」。これが一つの課題になるかと思えます。学校だけでなく地域の皆さんとわくわくする学校づくりをしてまいります。さらに、その中で先ほど言いました視点は、子供を真ん中に置いて、真ん中に置いた子供が見る視点、子供から見る景色、特に子供から見る景色にはしっかりと考えて、様々な課題に向き合っていきたいと思っています。そうすると結構課題は簡単に解ける方法が出てきます。

特に黒でちょっと濃くしておりますが、個々の家庭事情等で左右されず、子供たちに必要な力を育む。ここにはしっかりと取り組みたいなというふうに思います。そして、それをやっていく上で、大切なことは、特に協働的な学びも出てきます。協働的な学びでは、探求的な学習や体験活動、ここに力点を置きたいと思っています。

下関は歴史の街です。伝統の街です。これを下関教育がないがしろにすることはあり得ません。従って下関教育では、探求的な学習、また体験活動をしっかりやる材料がそろってる街であることを生かしていきたいと思います。その中で、一番下に書いていますが、下関の学校に実践して取り組みたいものとして、下関の歴史・伝統・文化、これは必ず体験見学してもらいたいなというふうに思っております。下関のすべての小・中学校、高等学校も含めて、ぜひ下関の歴史と伝統・文化に触れる実践をして欲しい。開かれた教育課程という言葉になるかもしれません。しっかりと取り組みたいというふうに思います。

もう一つは子供一人ひとりの資質の向上を図るということです。子供が学校で満足・幸せを感じているというふうな取り組みを進めたい。そのための調査研究を進めたい。この2点は、特に学校現場に今から求めていきます。また教育委員会で取り組みたいと思います。

あともう一つ、これを進める上でここには書いていませんが、下関には幼保小中高そして大学を持っています。この下関の大学には、この子供たち一人ひとりの資質の向上を図る取り組みを実践するだけの、研究ができる機能を持った大学がそろっています。従って大学にも協力してもらって調査研究を進めていきたい。これを子供たちに下していきたいと思います。下に書いてありますのが下関誇り百選でございます。これらを絶対学校現場に下ろしていくというのが私の願いでございます。

そういうふうなことで、次の資料でございますが、赤で囲んでおります人材育成です。もうここに今から、今までもそうでしたが、これからも、教育委員会と学校と、人材育成をとにかく使命だと感じて、必要な改革を進めていく。必要な改革というのが下関教育大綱でございます。この人材育成のポイントは、子供が考えて行動するというところでございます。そして大人が支援することです。子供に考え行動させるっていうのは、こちらは大きなポイントがあると思います。

働き方改革。これは大人が全部しようとするから、仕事がどんどん増えるわけです。子供たちに考えて行動させる。大人は支援する。子供に任せてみる。先日いろんな先生方と話す機会がありました。大変優秀な先生とお話をしたときに、「子供に考えて行動をさせる」、ここまでは素敵だなと思いました。しかしそのあとその先生が言った言葉が残念でなりません。それは、「子供が失敗をしてはいけないので、先生が要所で適切なアドバイスをする」。私はここはすごく疑問に感じます。任せたら失敗してもいいじゃない。そのぐらいの気持ちで、やらせてみれば、これは働き方改革にも繋がると思います。

そこで、委員の皆様方、市長さんも、学校がどんなふうになっている、やっているかっていうのがなかなか伝わりにくいと思いますので、どの学校もやっていますが、私が勤めた学校の資料を少しだけ持ってまいりました。一つは勝山中学校を出る前のものです。いろいろなことをやっています。写真は、川中中学校とやったことです。このとき考えたのは、すべての大会がなくなっている。中学校体育連盟の大会全部中止。そういう中で子供たちが考えたことです。コロナ禍だからこそ考える。今何ができるか。コロナとはこれからもつき合っていくわけです。従って私たちはどうすれば何ができるかを考えました。そうすると、自由に試合期日が決められ、自分たちが作り上げる。そして街の人が喜んでくれる。そして街の風物詩になるような大会を作ったらいいよっていうことで作りました。これをやったのは対抗戦ですので、よく大学の早慶戦とかそういうことを想像しますが、彼らが想像していたのは、木更津キャッツアイです。「地元の街同士が戦う」。これをテーマにして、彼らは作りました。

先生方も考えました。学びの講座です。コロナで学校に来ることができません。学校に来ないときに、何をするか。自分たちで教材を作って、学校のホームページに張る。でも、学校のホームページに張るだけではおもしろくない。勝山の企業とかに全部張ってもら。会社のホームページに張ってもらって見てもらう。ということで、自分たちで学びの講座を張りました。お父さんが家に帰って俺の会社にも張ってあるぞと自慢をするというようなことでございます。

対抗戦なんかはですね、自治会長さんが挨拶をして、コミュニティ・スクールの会長さんが始球式をして、負けた方のPTA会長が万歳三唱するというように、先生は一切入ってません。最後の一言「今歴史が始まる」。これがテーマです。こういうふうなことを学校はやっています。

また、これは市長の母校の文洋中学校でございます。文洋中学校は学力で大変悩んでるようなことを言っていました。そうすると子供たちが勝手に校長室にやってきました。「どうやったら勉強できるのか」。もうすごいいろいろと言うから、私たちが日課表をつくらうと言って日課表をつくりました。先生が勝手に教科教室をやりました。教科教室は難しいと言われる中、文洋中学校は教科教室に取り組んだという例でございます。

取り組みの中で、街の人も本当に温かい。これが下関です。先ほどからも言うように、街の支援があります。これは夏休み、昼の様子です。こういうふうな、給食、食事を作ってもらって、そして和室。この和室はエアコンが入ってませんでした。街の人がエアコンをつけてくれました。そして、ここで小学生から中学生と一緒に生活して、ご飯を食べている。こんなことをしていると、だんだん

んか楽しくなってきました。

そうすると、そこにありますが、来年度全国中学校総合文化祭下関開催です。ぜひ予算をいっぱいいただけたらなというふうに思ってます。これに以前文洋中学校が山口県を代表してる。

この二つの学校からいえることは、学力、心力、体力、間違いなく上がりました。何と言いますか、上がり方が急激です。ものすごく勉強をします。ものすごくスポーツをします。いじめとか当然ありました。大変な問題もありましたけれども、解決しようとしています。こういうふうな形になってくるということです。私は本当に楽しい思いをさせていただきました。

このように地元が愛する学校がありましたけれど、子供たちが学校を愛するようになります。この時おもしろいんです。何も言っていないのに生徒がTシャツを作りました。文洋の時は文洋魂です。勝山の時は勝中魂です。同じフレーズなのに相談もしてないのに。このように学校を愛する、地域を愛する子供。私は最後に勝山でも言いましたが、「君たちは5年したときに大人になる。5年したときにこの街の課題はある。その時は頼むな」という言葉をかけました。「10%でもいいんで学校に戻ってくれ。そうすると、5年後になれば100人、200人ぐらいになる」と話したのを覚えています。

最後でございますが、私はわくわくする学校を進めていく上で、よく授業が大事だと、もうほとんどの学校の先生が、いろいろな場所で話すと授業が大事だと言います。

「どうしますか」というと「授業改善」と言います。先生はわかりやすいようにタブレットを使っているのを見ます。すばらしい取組を下関はやっています。

ただ一つ付け加えて欲しいのは、「生き方を教える」ということです。この言葉がですね、実は社会体験研修で企業に一時出ましたので、その時にサマンサジャパンの小野会長さんに可愛がっていただいて、教えてもらった言葉です。

「磯部さん、授業で何で改善するの」と。小野会長にこういうことで学力を上げてと説明すると、「違う」と言われました。その時こう言われました。「授業で知識を教えるやろ。あの時に生き方を教えるんよ。生き方を教えると思ったらいい。だから学校の先生は素敵なんよ。子供は良いよね、中学校だったら、9教科。9人の先生に生き方を教えてもらってる。先生に知識を含めた生き方を教えてもらった子供たちはやがて未来を生きていくんだよ。未来を生きた子供はやがて大人になって子供を教えるんよね。おはようから教えるんだよ。要は教育は生き方を教えるんだよ。授業っていいよね」って言う話をずっとされていて、目から鱗が落ちるとはこのことかと思いました。「生き方を教える」この言葉は大好きな言葉です。これを下関の学校の先生方に伝えていきたいなと思います。

そして、よく言われる働き方改革があります。こういうような話をしますと、どんどん仕事が増えるというふうに思います。これは子供にさせてみる。任せてみる。子供は私たちが考えているより、はるかに優秀です。一つの例を挙げるとタブレットの使い方も私よりもはるかに進んでいます。知識はどっからでもとってきます。従って子供に考えて行動させたら、与えられた時間の中で、私たちの考えよりもはるかな結果を出してくるということを知った方がいいなというふうに思います。

今の若者の特徴です。自己肯定感さえつけていけば、私なんかできるかな、やれるかなとか、自分もだんだん捨てたもんじゃないかと、思い出してきた時に、私はできると思う速度がものすごい早いです。従って、若者の選手と話す時に、お前はできるんだよとか言ったらもうその瞬間私の話を聞かなくなります。そこでです。私はできると思ってる若者に、君はできると確認することで、ナンセンスな監督になってしまうのです。子供って怖くなって話をします。こういったことで、子供に考えて行動させる。これは大切なキーワードになるところです。

最後になりましたが、好きな言葉です。これは同じ社会体験で企業に出ている時に、吉水病院、今、大きな病院ができていますが、そこにいらっしやいました大好きな事務長さんの言葉でした。いつも一緒に騒ぐのですがその事務長さん、もと防衛省の方です。自衛隊の方でしたけども、僕に言ったんですね。「スマートで 目先が利いて 几帳面 負けじ魂 これぞ船乗り」海軍で海の方の人だったので、この言葉を教えてくれました。「どんな厳しいときも、本当に負けたらダメだよ。そしてあきらめたらダメだよ。情熱っていうけど、情熱は冷めるから気を付けなければいけないよ。情熱よりあきらめちゃいけないよと、毎日と同じように、あきらめない。これが大事よ。」こういうふうな言葉を大事にして、今からの下関の教育を進めていきたいと思っています。

とりあえずは具体的に進んでいくこと、伝統・文化、インクルーシブ教育や、それから満足度を高める、この3点です。

特に全体的にはインクルーシブ教育です。そして、やるべきこと、取り組みたいことは伝統・文化、これは絶対取り組みたい。これは下関の誇りです。そして満足度を高めていきたいと思っています。こういうことで、「夢への挑戦 生き抜く力 胸に誇りと志」を掲げて、下関の課題を解決してくれる子供たちが立派に成長して欲しいなと思います。以上で終わらせていただきます。

前田晋太郎（市長）

ちょうど時間になりましたけど、いくつか良い言葉がありましたので、少し意見を聞いてみましょう。吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

人材育成。これは教育長が言われたように指導者がわくわくしているかが非常に重要です。もちろん受ける側もわくわくするんですけど、やる側がわくわくしないと、これはどんなことでもそうなんですけど、お祭りとかでも、やる側が参加する人よりわくわくしている、それが大事だなと思います。

人材育成についてですが、考えて行動できる人を育てるのに、知・徳・体がすべてなのですが、理解の原則である「知っている、分かる」ここまでが勉強ですけど、「できる・教えてあげられる」これが一歩進んで考えて行動することではないかと思いました。

それからもう一つが、下関の歴史や文化でいくと、下関にはわくわくすることがたくさんあります。我々の知らないところにも、いろいろな方もおられ、いろいろなことがあります。あるゲームの全国大会の2位・3位になった子が下関にいたりとか、全国でも優秀な人がいたりとか、スポーツ、文化・芸術・芸能、いろいろな方がおられると思います。そういった方に目を向けなければならないかと思っています。それからもう一つ大事なことが、先生が先ほど言われたように、地域を巻き込むとか、そういうことも非常に大事なことだと思いました。だからこそ子供たちは、戻りたいとか、帰りたいとか、住みたいとか、この街でとか、この街にとということが生まれると思います。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。もうお一人聞いてみましょう。小田委員。

小田耕一（教育長職務代理人）

今ご説明いただいた言葉の中で、子供から見える景色を大切にしていくという、私はこれから大切にしていくキーワードとして、自分でものを見るという、子供たちの目に見えている景色というのはどうなんだというところを、私たちの立場から探求しながら、そして学校教育を進めていくことを私自身考えていきたいと思いました。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。最後の言葉で「生き方を教えていく」ということが私も非常にいいなと思いました。私が実は教育長にお願いしようと思ったこと。誰にも言ったことがないのですが、突然、磯部さんが現れて驚いたかと思うのですが、市長になる前からずっと見ていて、非常に何事にも情熱的で、心の底から、教育のため、地域のためにまっすぐ走って、自分の労をいとわないというか、自分自身の幸せを少しよそに置いて、目の前の子供たちのために一生懸命やる。こういった方はたくさんいらっしゃったのでしょけれど、たまたま私と縁があって、磯部先生にはこういうポジションで活躍して欲しいとずっと思っていたところタイミングが来たということと、もう一つ陸上の話がありましたけど、驚くほど全国的に活躍する選手に関わってきたという実績。そういった選手を育ててきた経験を評価して、期待をして。子供たちは真っ白なキャンパスですので、先生としての考え方、教育委員会として、我々行政の考え方次第で、どのようにも変わっていくと思います。逆にいろいろな課題、この後不登校のこともありますけど、学力もそう、体力もそう、心の面もそうだけど、決してあきらめてはだめだし、今日から、明日から、まだまだよくできる子供たちを育てて、下関の未来を創っていける。絶対にあきらめてはいけません。ここまで言うと、磯部教育長も大きなプレッシャーになるかもしれませんが、最後の責任は私がすべて取りますので、思い切って、自分を信じて、これまでの経験を生かして、謙虚な気持ちで大胆にやっていただきたいというふうに思っています。

今日は時間も限られてますので、磯部先生の話はこのあたりにさせていただいて、次のテーマに入りたいと思います。

【協議・調整事項】

「不登校対策」

前田晋太郎（市長）

教育長も何度も言っておられましたけれど、「学校はわくわくする場所である」と。しかしながら、学校に来ることができない不登校の子供たちが年々増加している。残念ながら顕著な数字が下関にも出ているということです。

教育長も校長時代に、非常に不登校教育に力を入れていたと思いますし、そういう状況とか現場の

姿というか、子供、親、先生の姿を見て来られたと思います。お互いに耳が痛い話があっても、ここはそれをグッと堪えて勇気を出し合う会議だと思っています。非難する場所ではありませんから、事実であったこととかをどんどん言っていただいで、改善に向けたヒントを見出す時間にしていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

では、現状と課題について、事務局より説明をお願いします。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

学校教育課 生徒指導推進室から、「不登校対策～誰一人取り残されない不登校対策を目指して～」と題しまして、下関市の不登校の現状や課題、対策について説明させていただきます。よろしくお願いします。

まず、不登校の定義について確認しておきます。不登校とは何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、年間30日以上欠席した児童生徒のうち、病気や経済的理由によるものを除いたもの、となっています。

また、令和2年度から4年度については、新型コロナウイルス感染症の感染回避のため、登校しなかったものも除いています。

近年の不登校について説明する前に、まず、新型コロナウイルス感染症の影響について触れておきます。お示ししているのは、市内の小中学校から、毎月、教育委員会に報告される「不登校が疑われる月に3日以上欠席した児童生徒数」の変化です。コロナ禍であった、令和3年度と4年度に、特に中学校で月ごとの報告数が増加しています。

では、ここ5年間の不登校児童生徒数を表でお示しします。令和4年度は、小学校で224人、中学校で454人、合計678人で、大変深刻な状況となっています。また、下のグラフは学年ごとの人数を示していますが、小学1年生から中学3年生まで、徐々に不登校数が増加する傾向となっています。

下関市と山口県、全国の出現率、1,000人当たりの人数での比較をお示しします。グラフにもしていますが、下関市は山口県・全国と比較して多いまま推移しています。

続いて、不登校の要因の主なものについてお示しします。小中学校ともに、無気力・不安、生活リズムの乱れ、友人関係をめぐる問題が多くなっています。また小学校では親子の関わり方、中学校では学業の不振が挙げられており、発達の段階に伴う要因も挙げられています。

また、教員が対応する中で、集団生活になじめない者や、精神的に不安定な保護者の影響もどうかえ、中にはその理由がわからない者もいるなど、その背景や要因は、複雑化・多様化しています。

次に、不登校児童生徒の欠席日数別の分布です。お手元の資料にはありませんので、モニターをご覧ください。上段に小学校、下段に中学校。それぞれ左から平成30年度、令和2年度、令和4年度のものをお示ししています。グラフの縦軸が人数、横軸が年間の欠席日数で、一番左が年間30日、右に行くに従って、欠席日数が10日ずつ増えています。小学校では、30日から60日までが特に増加していき、それ以上の日数は、ほぼ横ばいのL字型の分布になってきています。一方、中学校では、30日から60日とともに、190日あたりが増えてくるなど、M字型の分布になってきています。

ここまで、不登校児童生徒数の推移、要因、欠席日数別の分布状況等を見ていただきましたが、私たちが、現状で一番の課題と捉えているのが、「不登校の状況や背景・要因の多様化・複雑化」です。特にその中でも、対応に苦慮しているのが、適切な心理的距離がとれないなど、他者とのかかわりを苦手とする子供や、学校という集団生活になじめない子供が増えてきていることです。

併せて、経済的に困窮している家庭や精神的に不安定な保護者といった、多様な家庭の状況が、不登校対策を難しくしています。

このような状況を改善するため、文部科学省は2つの大きな指針を示しています。1つ目が、平成28年に公布された「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」、いわゆる教育機会確保法です。不登校児童生徒に対する教育機会の確保、夜間等において授業を行う学校における就学機会の提供、その他の義務教育の段階における普通教育に相当する教育機会の確保等を総合的に推進するとともに、不登校児童生徒の休養の必要性を踏まえた支援に努めるよう求めています。これを受けて、昨年改訂された生徒指導提要の中でも、「不登校児童生徒の支援の目標は、将来の社会的自立である」とし、登校という結果のみを目標とするのではないと示されました。

2つ目が、今年3月に出された「不登校対策COCOLOプラン」です。このプランでは不登校児童生徒の中に、学校内外で、相談や指導等を受けられていない子供が一定数いることを、当面解決すべき課題として掲げ、「不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにする」ことを目指して、大きく3つの取組を示しています。まず、1番に示されたのが、不登校の児童生徒すべての学び

の場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整えることです。学校にサポートルームとなる校内支援センターの設置を行うとともに、不登校児童生徒を受け入れる特例校の設置など、新たな学びの場の整備を求めています。

2番、3番に示されているのが、学校における支援の見直しです。不登校の未然防止に向けたチーム学校としての組織的な取組とともに、授業改善や校則の見直しなどが必要であると示しています。

併せて、取組の実効性を高めるために、一人ひとりの不登校となった要因や、学びの状況などを把握、分析した上で、対応することが必要であるとしています。

このプランの推進のイメージ図です。学校、行政、家庭はもとより、地域社会やフリースクールなどが、切れ目のない連携の輪を構築し、支援することが求められています。先ほど述べましたように、特例校の設置や校内教育支援センターの設置、今ある教育支援センターの機能強化、保護者の会を開催して保護者支援を行うなどの取組が盛り込まれています。詳しくはシート22以降に概要を載せています。後程ご覧ください。

では、下関市では現在、どのような不登校対策を行っているかをお示しします。大きく6つとなります。

1つ目、不登校児童生徒が通う教育支援教室「かんせい」と「あきね」、また2つの分室を運営しています。これは教育支援センターとも呼ばれるものです。また、「かんせい」や「あきね」から家庭訪問による学習などの支援、(3)の訪問支援も行っています。

次に、専門的な知識・技能に基づき、児童生徒やその保護者、併せてそれらを取り巻く環境への支援を行うために、カウンセリングアドバイザーやスクールソーシャルワーカーを派遣しています。

ほかには、学校での別室登校を支援するためにガイダンスアドバイザーを中学校区に配置、保護者支援を進めるために相談電話の開設や保護者の集いの場となる子育てサロンなども開催しています。

また、フリースクールとの連携を進めており、教育支援教室との情報共有や児童生徒同士の交流などや、その児童生徒の状態に適した支援をするようにしています。

併せて学校では、小さなSOSを見逃さないように、週1回の生活アンケートを実施するとともに、定期的な教育相談、初期段階からの家庭訪問はもちろんのこと、不登校児童生徒が利用できる別室の設置や1人1台端末の活用による学習支援など、できる限りの対応に努めているところです。

先ほど、課題として申し上げたように、不登校の状況や背景・要因が多様化・複雑化する中、不登校を全体的に捉えるのではなく、様態などで区分けして状況に応じた適切な支援を行うことが必要であると考えています。

まず、欠席日数別でおおまかに分けてみます。小学校はL字型の分布、中学校はM字型の分布でしたが、図のA群とB群に分けてみます。A群は50日以下の欠席で、おおよそ年間40週ありますので、平均すると週に1日の欠席、つまり4日程度は登校している児童生徒。B群は、おおよそ90日以上欠席で、週に2・3日の登校、更には、なかなか登校できない児童生徒となります。

A群の子供たちは、週4日は出席しているので、学校での関わりを重視します。いかに、この子供たちに、「学校は、楽しいところ、わくわくするところ」と感じさせることができるかが、ポイントです。その中心が授業改善だと考えています。これについては、後ほど改めて説明させていただきます。

続いてB群の子供たちですが、学校だけでの支援では難しいので、学校以外の機関や施設との連携を進めていきます。

B群については、更に細かく対応を考えていく必要があります。そのカギは、子供の思いや願いを理解し、寄り添うことです。学校や教室への復帰を目指しているのか、目指すけれども難しいのか、目指していないのかによって、支援の仕方を変えていきます。

別室登校や教育支援教室への通級のどちらが適切なのか判断することも必要です。教育支援教室を利用しながら、学校復帰に向けて別室登校にチャレンジするようなこともあります。

また、現在の学校への復帰は望まないが、高校進学に向けて通常の授業が受けたい子供には、文洋中学校の分教室への入学や転校を促し、少人数の中で、将来を見据えた生活が送れるように支援をしていきます。

学校や教室への復帰を目指さない子供の中には、「学校に通うことに価値を感じていない」、「今のカリキュラムでは自分のしたいことができない」、「もっと自由に学びたい」など、既存の学校を選ばない子供たちが一定数います。

そこで、現在検討しているのが、不登校特例校の設置です。通常の学校に比べて、年間時数を減らしたり、体験的な学習を増やしたり、相談体制を充実させたりするなど、子供が自分に合った学びを選択でき、安心して生活できる「居場所」となるような新しい形の学校が必要ではないかと考えています。

また、集団生活になじみにくい児童生徒には、その意向に沿って、ゆったり過ごせるフリースクー

ル、和室や縁側がありアットホームな「あきね」、学校の教室で学習することが多い「かんせい」、それぞれの良さを生かした支援をするようにしています。

シート18 家庭への支援について説明します。課題の1でも触れましたが、困窮している家庭や精神的に不安定な保護者が多くなってきた印象があります。そこで、教員では対応しきれないケースについては、専門的な知識や技能を持っているスクールソーシャルワーカーやカウンセリングアドバイザーによる面談や見取りを基にアセスメントを行い、必要に応じて関係機関との連携を進めるようにしています。

次に、不登校対策の中心である学校における対策の課題についてお話します。一番の課題は、「支援策につなぐりにくい、届かない不登校の児童生徒と家庭がある」ということです。家庭訪問しても誰にも会えない、電話にも出してもらえないなど、学校からの関わりを拒む、中には強く拒否する保護者もいます。併せて、担当しているクラスの中で、また学校全体で対応しなければならない子供が増えれば増えるほど、対応すべき教員の負担が増え、丁寧に対応することが難しい状況になっています。

別室登校の支援では、学校の教員数によっては専門の教員を配置できなかったり、別室で児童生徒に学習を教えようにも、通常の授業や他の業務の合間でしか、関われなかったりしています。また、専門的な対応が必要で教員では対応しきれない、複雑化・多様化した不登校のケースが増えてきました。

ここまで、本市の取組状況等について説明をしましたが、すべてが効果的に支援できているとは考えていません。見直さないといけないもの、新たに取り組まないといけないものがあることも理解しています。

まず1つ目は、居場所づくりを意識した授業改善です。学校生活の中で大部分を占める授業が児童生徒にとって魅力あるものでないといけません。自分の居場所が教室にあると思えるよう児童生徒同士の関係性を授業の中で育てていくことが大切です。

次に、専門的な知識・技能をもったスクールソーシャルワーカーやカウンセリングアドバイザーを、これまで以上に教育委員会から適切に派遣、配置するようにしたいと思います。

また、なかなか自宅から外に出られない児童生徒でも学びにつながるよう、1人1台端末を効果的に活用できる環境の整備を進めていきたいと思います。

それとともに、不登校の子供たちの声に耳を傾け、彼ら自身が自らの手で社会的自立を目指すことができる新たな機能をもった不登校特例校の設置に向けた検討を加速したいと考えています。不登校により学びにアクセスできない子供ゼロを目指して頑張りたいと思いますので、どうぞたくさんのご意見をいただければと思います。

以上で、生徒指導推進室からの説明を終わります。

前田晋太郎（市長）

数字から入って、説明を聞かせていただきました。数字はなかなか厳しい数字で、令和4年度の速報ってというのは、今は令和5年度ですが、どの辺りに落ち着いたんですか。最終値ですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

ほぼ速報値と同じ程度の数字なるであろうと思ってます。9月を目途に数字が固まる見込みです。

前田晋太郎（市長）

何日間来なかったらこれにあたる人になるんですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

年間30日欠席したらという大きなくくりがあります。その中で病気による欠席であったり、経済的理由である欠席であったり、後は、先程申し上げましたけど、令和2年度、3年度、4年度は新型コロナウイルスの感染回避ということで休むといった子もいましたので、それを全部除いていって、心理的な要因であったりで学校に来ていない子の数です。

前田晋太郎（市長）

その数を除いての数ですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

そうです。

前田晋太郎（市長）

わかりました。では皆さんご意見を出していただきたいと思います。はい、吉村委員どうぞ。

吉村邦彦（教育委員）

いくつかあるんですけども、一つは、LとMのB群というところに注力を置いてされることもそうなんですけど、このA群のところも非常に負担ですけども、言ったら予備軍なわけですよね。ですから今から増やさないということかというと、今学校に来ている子供たちで比較的休みがちな子、このケアも非常に重要なのかなと思います。

それから先程言われましたとおり、多様化、複雑化しているというふうなことであれば、不登校から引きこもりになって、それから社会へ適応できなくならないようにしないといけないと思うんです。そのための学習支援とか自立の促進っていうのを先程教育委員の中で話しておりました。ここが非常に重要なのかなと思います。

今は人間関係というのが必要なくなっている部分もたくさんあります。要は無人工化されたりとか、メタバースとか、ICTでフォローできていることもたくさん出てきているので、そういうこともまだまだ子供なんで、教えていながら、社会にどういうふうに対応できるのかということも、彼らには必要な学習なのかなと思います。

それとこれは皆さんも見られている内容だと思うんですけど、2022年の第1位は人間関係。その中でちょっと気になったのが、その中の30パーセントが先生とのコミュニケーションエラーで不登校になったという子がいるみたいです。後は、いじめを受けているんですけど、先生とうまくいっていないけど、親に相談できない子が非常に多くて、そうすると部屋から出てこない子供たちが非常に多くなっているというのを聞いています。

それから、下関市では第1位なんですけど、全国的には2位が無気力。3位が勉強の遅れ。4位が学校になじめない。5位が家庭環境。6位が生活の乱れ。やはり原因がわからないのも非常に多いみたいです。その中で先程教育長が言われたように生活の規則をきちっとして、日常的にコミュニケーションが苦手な子もいると思います。そういう子に対して予備軍にならないように、きちっとフォローしていく。セカンドプレイスということをや学校で創れないかなと思います。

それからもう一つ。これは実体験なんですけど、この前教育委員会ではお話をさせていただきました。うちの従業員の娘さんがあまり学校でのコミュニケーションがとれずに風邪薬をたくさんネットで買って、大量に飲んでたことが発覚して、何年も前の話です。それを親御さんが発見して、学校の先生に相談したら、カウンセリングの先生に相談したら、「お母さんはどうしたいんですか」というふうなことをおっしゃられて、どうしたらいいかわからないのでカウンセリングの先生に相談させていただいてますという話があって、勉強されているカウンセラーの方だと思うんですけど、要は保護者が何を求めているのかっていうことも含めて、もっと深く入り込んでいただけたら、よかった。今はちゃんと高校生になって学校に行っていますけど、そういう話をちらっと聞いたので、先生方も人間ですし、カウンセラーの方も人間ですから、ケースバイケースで、難しいコメントを出す場面もあると思うんですけど、そこら辺をもっともっと受け止めてあげていただきたいなというふうに思いました。以上です。

前田晋太郎（市長）

では、畚野委員。

畚野美香子（教育委員）

不登校ということで、何が原因か多岐にわたってくるのですが、先程、吉村委員からあったように、薬物依存やゲーム依存、病気であったりということもあると思います。ただ依存や病気であるということが、普通に見てわからない場合、朝起きられないなど、原因がわからないとなると怠けているんだと先生が判断して怒ってしまう。「早く起きればいいじゃないか」と親もそうですけど、そういったところの理解っていうのが大事なかとすごく思います。

その理解するためですが、そういった依存や病気などの対応の仕方を子供たちや、親、先生方にも知識を最初に教えていただけるような、専門家の方に勉強会をしていただけるような機会をもう少し増やしていただけると、知識がある上での行動がとれてくるのではないかと思います。

先程の教育長の話にもあったように、子供に考えて行動させるということにもつながってきますが、知識があることで、知っているということが子供たちの財産にもなりますから、ぜひ、知識を増やすという意味でも専門家の先生方にそのあたりをお願いしたいです。

あと、市長に質問なのですが、先程教育委員で話したのが「着地点」。不登校の子供たちが、最終的にどうなることが「着地点」であるかというのを、もしよろしければ市長のお考えを教えてくださいと思います。

前田晋太郎（市長）
子供たちがですか。

畚野美香子（教育委員）
吉村委員が協議している時におっしゃっていたので、吉村委員少し説明していただいでよろしいですか。

吉村邦彦（教育委員）
私は不登校の子供たちが学校に出てくるのが1番良い事なんですけど、それを求めることはなかなか難しいと、それよりも先程申し上げたように、社会に出られるように、学校の9年間の期間だけではなくて、その先を見据えて社会できちんと生活ができるように、社会の一員として機能するというか、生活ができるようになれば、私はそれで100点だと思います。
そのあたりを市長がどう思われているかを共有したいということです。

前田晋太郎（市長）
私は、居場所を見つけてあげることだと思っています。それは今聞かれてどう答えるか考えているところですが、最初に思ったのが、自分の部屋で閉じこもっているんだったら、それ以外の場所を学校を含めて、要は生きがいというか、生きる光というか、そういったものに気付かせてあげることなのかと、それが人間として、生きていく中でのエネルギー。一步踏み出すためのエネルギーにつながって行って、それってなんでそうなのかという、これは大人も一緒なんです。人間ってどんな年であっても、どんな環境であっても仕事だろうと、自分の居場所があればやっぱり、頑張れるんですよ。何歳でも。例としては適切でないかもしれませんが、私は市議会議員になって、青年会議所（JC）という組織に入った時に、百数十人いて、恐い先輩とかいて、全然おもしろくなかったんです。人から頼まれて入ったんだけど、年会費十何万円も払って、家族も犠牲にして、自分の時間を犠牲にして、なぜ入っているんだろうと思うときに、実は、JCの中の野球チームに入ることがきっかけで、たった2、3週間のことだったんですけど、チームに入って人を知る事ができて、自分の活躍の場所が見出せて、全く活躍できなかったのが突然JCが楽しくなった。その時に居場所って大事だな。それは市職員の1年生にも言うんですが、早く居場所を見つけてねって。それは仕事で見つけてもいいし、誰か1人好きな人を捕まえてもいいし、何か自分の趣味を共有できる人を捕まえても良い。なんでもいいので、何か仕事以外に帰り道に素敵なお店があって、そこに通うのが好き。何でもいい。

だから引きこもりの子ってゲームしかないんじゃないかと思っていて、それ以外のものを見つけてあげる。でもすごく難しいと思うんですけど。じゃあここに行けばもしかしたら良いものを見つかるかもしれない、でもその一歩がなかなか出ない。そうすると、さっき畚野さんが言ったような親に対するアドバイス。一番近くにいてくれる人達へのアドバイス。どう接していいのかとか、家庭の経済的事情とか、お父さんがいないとか、お母さんがいないとか、本当に苦しい状況の方もいらっしゃると思いますが、そういった方々にアドバイスをできるような環境を作ってあげるのもいいかもしれないし、今話ただけでもいろいろヒントがあったなど。遠回りで長くなりましたが、私は居場所を見つけてあげて、その楽しみが、「あっ、僕変わった」、「あっ、扉を開けることができた」って自分が気付いたら、きっと大人になっても、苦しい時に自分でその光をまた探して、暗闇の中を歩ける勇気、そういうものを、要は経験なんですよ。人間、経験の積み重ねで強くなっていけるのだと、それはヒントかなと思いました。

はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）
今おっしゃった居場所という部分でいうと、何かガヤガヤ騒いでいるという部分に興味を持つじゃないですか。何でもかという、僕の地域でK a n a n o w aとか、照子親って活動を協力させてもらってますけど、何か楽しそうじゃないですか。それなら子供たちも、普段あんまり会話のない子供たちも集まっているいろいろガヤガヤやっている。そこから何か新しいものが生まれてきている。

子供たちがいろいろ工夫して考えていく。もちろん大人がすごく負担を強いられているんですよ。市長の奥様もものすごく大変な思いをされていらっしゃるんですけど。大人は大人で子供の笑顔にすごく感動して、子供たちは大人のそういう姿を見て、この街ってまんざらじゃないなと思ったり、多少今言う家族とか問題のあるような子供たちもそういう騒いでいるところに行ってみようかなということ集まっていると思います。

前田晋太郎（市長）
K a n a n o w aは本当にすごい。涙がでますよ。うちの嫁も今日も行ってきますとあって、130

食ぐらい、毎日朝から作って、20キロひき肉買ったり。エビフライ500匹むいたりとか。毎日やって、すごく幸せそうなんですよね。1円の報酬ももらわずにやっていますけど。それを見て、子供に愛を与えてあげていることが、幸せなんだろうなと、実際文洋の子供たちは、さっき言ってましたけど、何というか、めちゃくちゃ良い子って皆、小学4年生ぐらいから中3ぐらいが、この何分の1の空間で、皆ぐちゃぐちゃになって、毎日勉強して、一緒にご飯を食べて、遊んで、コロナとか関係なくわちゃわちゃになって時間を過ごして、親が何人かで面倒見てあげて。本当に皆良い子で、明るくて。

昔文洋って、ねえ吉村さん。佐々木さんも。タバコは当たり前、夜の徘徊も毎日、喧嘩ともう本当にわやでしたけど、今は一人もいないですけど。ちょっと学力低いけど、何とかなるかって思ったりとか、何で皆こっだけ頑張っているのに、勉強できないんだろうって不思議に思っていました。

どうでしょうか磯部教育長。現場にもいらっしやって、Kananowaにもいらっしやいましたよね。

磯部芳規（教育長）

先ほど話したんですが、地域の方が生き方を教えているんです。そういうことを子供たちが経験するというのは非常に大きいなと思います。不登校対策っていうのは、学校に来る来ないが問題ではなくて、そういった事が問題の時代ではないんじゃないかと思います。生き方をどこで見つけるか。居場所があるってことは、そうやって大人と、友達と、いっしょにいる居場所があるっていうのは本当の財産になっていくんだろうと、それが無い子供は可哀そうだなと。

昔、岩国の学校の時に同じような街の方が入って、良い学校だなと思ったんですが、1人だけどうしても出て来られない生徒が卒業式だけ出てきてくれて、その時は申し訳ない気持ちでいっぱいでした。努力はしたんですけど、楽しい場面を作っていくことができなくて、それは反省を超えた残念な気持ちでした。

前田晋太郎（市長）

はい、佐々木委員。

佐々木猛（教育委員）

居場所づくりという言葉が出ていますが、私もつくづくそれを感じます。というのも、教育長が冒頭で言われたSociety 5.0によって、これからのすぐそこにある未来の社会に、どこまで子供たちが求められるものがあるのかと考えた時に、ここまでICTが進んだ時に、あえてここに行かないといけないというのもなくなくなる時代にもなってくるのかなと。ただ学校に行けるというのが一番理想かなとは思いますが、そこだけにこだわらず、居場所づくりがしっかりあるのがあるのかな、私も彦島中学校区で、家庭教育支援チームというのをやってやっていますけど、いろいろ座談会でやりながら、いろいろな過去の先輩方、現役の保護者の方々と、子育てについていろいろなヒントをもらう勉強会をやっているんですけど、非常に真剣に出てきていただける保護者の一人のお子さんが不登校ということがあったんですね。いろいろ皆さんの話を聞いて参考になりましたと言いつつも、この家庭教育支援チームに、その子供に対する想いが何かありますかって質問を投げると、「我が子に関しては触れないで下さい。」「大きなお世話です。」と言われたことがあったんです。だからそこは真剣に保護者として捉えている部分もあるんですけど、先ほど言った居場所づくりという部分では、いろいろな言葉は聞くんですが、我が子に関しては本気になりすぎて、シャットアウトしているのが多いのかなと。先程畚野委員がおっしゃられた、CA、SSWっていう方を知っているかということ自体も、なかなか知らない保護者も多い。だから子供だけでなく、保護者も含めたCA、SSWの活用っていうのがもっとあってもいいのかなと。どうしても保護者からみると、そういう専門家の方に相談しませんかと学校から言われると、そんな状況じゃありませんとか、断る方が多いんですけど、今までの活動を見ていると、子育てに関して来ていただけるんですけど、我が子に関しては防いでしまっている、じゃあその子は居場所があるのかっていうと、保護者が防いでいるのか、子供がそこが一番楽だからそれ以外をさせようとしなくていいかわからないんですけど、大人の方がそれを活用することによって、我が子に対してどこまで開くことができるのかっていう相談っていうのもありなのかなと。最近私たちがやっている活動で、そういうお子さんがあるときにはSSWの方とかに、つなぐという役割をやっているというふうに言っています。なので、同じ構成員のメンバーの中に、近所のSSWの方にもメンバーに入っていて、こんな人がいるんだよって紹介からしている気がしてならないんです。その辺りも含めて、先ほど子供の居場所づくり、学校に来る必要がないんじゃないかという意見もありましたが、もっと子供の前が開ける状況下を一番開けるのは保護者しかいないと思っていますので、そこを開く環境づくりというのは必要かと思っています。

前田晋太郎（市長）

はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

先ほど生徒指導推進室からあった不登校特例校って話なんですけど何か計画があるんですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

設置に向けて検討を行っています。

吉村邦彦（教育委員）

私はすごく良いと思うんです。複雑、多様化した環境で、学校には行けないけど、こういう学校だったら行って勉強したいという子も絶対いるなと思うので、さっき言ったセカンドプレイス、居場所ということで言うと、ここがそういう居場所になってくれれば。今、数字で下関は何か手を打たないと今後まずいなというレベルですので、先ほど少し言いましたけど、予備軍もすごく多いです。私も朝、見守り隊をやっていますが、お母さんに抱っこされて、無理やり行かされている子供がたくさんいます。途中まで先生が迎えに来て、強引に人さらいのような状況で連れていく光景もあります。低学年なら可能ですけど、中学年、高学年になって体格も大きくなってくると当然対応できなくなりますので、だからこういう学校があって、行ってくれるというのが家族の安心にもつながると思います。

前田晋太郎（市長）

はい、小田委員。

小田耕一（教育長職務代理者）

話している内容がよく資料にまとまっているなど説明を聞かせてもらいました。まず、スライド9のところ、支援の目標は将来の社会的自立ということが書いてありますね。それから、不登校のいろいろな対応に合わせたそれぞれの対応の仕方。対応に合わせた対応の仕方が、スライド10やスライド12のところ、詳しく書いてあって、これは今話している、いろいろな子供たちに、いろいろな状況に対する居場所づくりをしている。それから、誰一人取り残されない学びの補償に向けた連続性という点で、すごく居場所づくりについては、網羅されていると思いました。これをどう実践していくか、それをどういうふうに着させていくか、そこで出てきた問題をどう改善していくか、それを中尾室長が「すべてうまくいっているとは考えていません。まだ改善すべきところがあったらやっていきたい」ということがあったと思うんですが、やはり実践しながらそれぞれのところで、それぞれの対応ごとの対応をまた一つ上の段階につないでいくためには、どういうふうにしたらいいのかというのを実践を通して考えていくことが必要であるだろうと思います。一つ居場所づくりという状況に対してどう対応するかというところがずっと書いてあるんですけど、スライド20のところ、私はこれは究極だと思うんですけども、不登校特例校の設置というところに、どうして学校に来るのかの検討とありますけど、学校にはなぜ行くのかというところをもう一つ目的を持たせるという意味で、居場所づくりが一方、もう一つがなぜ学校に来たら価値があるのかというのをやはり、我々も検討していかなければいけないのかと思いました。

前田晋太郎（市長）

不登校特例校にはお二人から前向きのご意見がありましたけど、その前に「かんせい」と「あきね」の子供たちの最近の利用状況とかはどうですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

安定して通うようになると、どんどん自信をつけていきますし、コミュニケーションも大人である支援員であったり、同学年の子供たちであったり、どんどん自信を持っていき、笑顔、表情も柔らかくなってきます。ただ、全てが安定して通える子たちでないで、時間をかけて丁寧にやっているところですけど、やはり、意味のある場所になっているなど、居場所とありましたけど、子供たちの居場所になっているなど。

前田晋太郎（市長）

そうそう。居場所になればそれで良いと思うんですよね。そこを充実させていくことは一つ大切。4番に通じるようなものだと思うんですけど、今は大丈夫なんですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

「かんせい」と「あきね」というのが授業をどんどんやっていくようなところではないです。多くの活動を取り入れていこうとするんですけど、どうしても限りがあります。

不登校特例校となると、だいたい1000時間ぐらい授業をしないといけないところを、特別なカリキュラムを作ることが許されます。そこで授業も当然します。高校進学を目指す子も多いです。子供たちは目標にします。皆と同じで高校に行きたいと思うので。授業もするのですが、例えば体験活動を多めにとってみよう、勉強もできるけど、自分の自信にもつながる、自分はこういうこともできるようになったとか、人間関係、コミュニケーションとかそういった部分も伸ばすことができます。そういったところが特例校の良い部分です。

前田晋太郎（市長）

はい吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

「かんせい」と「あきね」で待機生徒はいるんですか。要は定員がいっぱいで入れずにいる子供たちはいるんですか。

中尾琢磨（教育指導監（生徒指導推進室長））

どんどん入ることができます。待機生徒はいません。

前田晋太郎（市長）

はい、木下専門監。

木下満明（学校教育専門監）

学校というところは学びの場のオンリーワン、ただ、今話をさせていただいたように正直オールマイティではない。今の学校教育の制度自体がですね。学校教育の場から本当に大切だと思っているけど、集団の特性とかがあっていけないとか、今の学校教育が何となく自分に合わないとか。そういった中で、「かんせい」と「あきね」はお子さんの学びをただ助けるというサポート的な役割になっています。文洋中学校にある分教室は中学校と同じカリキュラムを少人数でやる。ですから、分教室は学校。

「かんせい」と「あきね」は塾ではないけど、そういうふうなものになっています。ただ、分教室と今から検討していく不登校特例校の一番の違いは、先ほど室長が言いましたけど、分教室はあくまでも学習指導要領にのっとった授業をやっていますので、少人数ではあるんですけど、その辺の一人一人にあうマッチングという部分では、正直難しいところがあります。先生方の自由度もない。こういった子供たちだからこういふにしてあげたいなと思ながらも、学習指導要領に縛られてしまう。今度検討しています特例校というのは、文部科学省と協議していかなければいけないのかもしれませんが、どこまでが最低限のナショナルスタンダードでやらなければならない部分か、削って削って、そして子供たちの声を聞きながら、その辺にどういったものを組み立てていったら、子供たちの学びの場としてふさわしいのかというのを作っていく。分教室はあくまで分校なので、正直、中々完結しないんです。本校との連携があるのはすごく良いことなんですけど、分教室だけで完結することができないので、もし特例校となると、校長を置いて、教頭を置いて、教員や養護教諭も全部置くという形になります。そうなるそこだけで、自分達が目指す学校を作る事ができる。子供たちにあった教育課程を自分達で組むことができるという形なので、下関市で整えることができれば今の子供たちにとって、学びにつながる場を提供できるのかと思っています。まだ検討段階です。

前田晋太郎（市長）

わかりました。はい小田委員。

小田耕一（教育長職務代理者）

通常の教育課程になかなか乗りきれない子供たちに柔軟な教育課程をつくって、学校を運営するというのは、ちょっと前の特別支援教育の支援学校とか支援学級の発想と同じように通常の教育課程では、教育が効果的に行えないから変えるということであれば似たようなところがあると思います。だから、それは今現状として、通常の教育課程では対応しきれないというところから考えだした特例校であれば、ぜひそれを進んでいくということが、一人ひとりを生かすとか、取り残さないとか、教育長のお言葉ではインクルーシブとかそういうこととつながっていくのではないかと思います。

前田晋太郎（市長）

時間になりましたので、不登校については締めたいと思います。結論というわけではないんですが、

いろいろキーワードが出ましたけど、そこにまた、教育委員、教育部の皆さんはヒントを見出して、1つでも2つでも、取り組んでもらえると良いと思います。居場所であり、やっぱり、学校は明るく、楽しくあるべきというのが大前提かなど。最後は人ですからね。やっぱり皆に会いたくて行くんですよ。当たり前のように体が動いて行くんですが、そうじゃない所に来ているんだろうなと思います。なかなか、中のことが見えにくいので難しいですが、数字が少しでも良くなっていくように改善の努力をよろしくをお願いします。

【その他】

前田晋太郎（市長）

教育長、さっき伝統文化をやりたいとおっしゃっていた中に誇り百選の話があったと思いますけど、掘り下げてもらって、どういう話ですか。

磯部芳規（教育長）

各学校と、まず近くにある、例えば長府でしたら、長府の歴史博物館。地元でありながら行っていない。例えば私は家の前に東行庵がありますけど、地元に行っていない。なので、まずはそこから、各学校に呼びかけたい。

前田晋太郎（市長）

これは下関あるあるで、海響館に行ったことがない人が下関市民にいます。

吉村邦彦（教育委員）

東京都民で、東京タワーに登ったことがある人が2割しかいないみたいです。

前田晋太郎（市長）

ちなみに私は観覧車に乗ったことがないんです。

吉村邦彦（教育委員）

もうなくなるんですよ。

前田晋太郎（市長）

それはまだわかりません。ただ高いところが苦手なんです。海響館に行ったことがない人がいるということで、地元の施設、歴史を知ることが地元愛着への第一歩ですね。それで実はですね下関誇り百選は、平成17年の合併前に下関百選があって、豊浦町百選を作って、2百選あって、それをこの度、百選に絞って作りなおして、結構カッコいいプロモーションムービーを作った。でも、それを公開してないんです。なんで公開しないのかオープニングの時に言ったら、すごく大変だったんでしょうね、作った人が「無料で公開したくない」と。何のために作ったという話で、いつか時間が経てば公開するかと思っていたらいまだしないんです。どうなのかこれはというのがあって思い出して、子供たちに見せてあげたいんですよ。

佐々木猛（教育委員）

確かに。DVDでもあれば。

前田晋太郎（市長）

今は学校はDVDですか。何で見せますか。

藤田信夫（教育部長）

DVDです。

前田晋太郎（市長）

DVD、YouTubeでも良い。データ化すれば見れる。教室にはDVDプレーヤーはあるんですか。

木下満明（学校教育専門監）

学校にはありますが、各部屋にはないです。

前田晋太郎（市長）
各部屋で見るんです。

木下満明（学校教育専門監）
でしたらY o u t u b eが一番良いと思います。

前田晋太郎（市長）
それならそれで見せて、皆で一通り見て、歴史を学ぶ。これは新しい教育長の考えをさっそくやりましょう。

磯部芳規（教育長）
よろしくお願いします。

前田晋太郎（市長）
地元の施設を皆で探して、皆で行く。いいじゃないですか。
時間が迫ってまいりましたが、皆さんご意見があれば。

吉村邦彦（教育委員）
私の方から、一応レポート皆さんにお渡ししてありますが、Child care Support Cityっていう難しく書いてますけど安心安全で、子育てしやすいまちに下関がなって欲しいという思いと、あとはハードの部分とお金がかかることが書いています。

1は幼稚園W i - F iとか幼児教育の中で、動く道具が幼稚園にもありません。本しかなくて、静止画しかなくて先生たちが自分のi P h o n eとかで子供たちに動く動物、虫を見せているというのが現実です。このあたりやはりきちっと、小学校中学校と同じようにしてあげていただきたいというふうに思います。

それから、資料につけていますけど、3ページのグラフなんですけど、もう現実問題として、気合と根性ですこれ暑さを乗り切ることなかなか難しい時代になってます。実際に猛暑日と言われるものが今139日、これは福岡です。それから、猛暑日の日数ですけど全国平均で言うと、もう過去の方の2倍ぐらいになっていますし、体感温度で言うと体温を超えてる日にちが非常に多くなって、そういう意味では、お金のかかることですけどもP T Aとか地域の皆さんにご協力をいただきながら給水機の設置とかも検討、これ前回もお話しましたが、お考えいただければと思います。

それから適正規模・適正配置で、学校の統廃合があるんですけども、やはり最後のページ写真がありますが、この体育館倉庫の屋根がもう近隣にこういうふう来接しているというふうな状況で、これが何か台風が来たりとかですれ今回の大雨みたいなことがあっても、近隣に迷惑をかけないようなレベルで修復できていけばいいなというふうに思います。

それから、市長もご承知の通り養治小学校では校歌を歌と手話で練習されています。子供たちにこういう取り組みを通してノーボーダーとかを学ばせるのに非常に良いんじゃないかなというふうに思いますし、先ほど、教育委員で話している時に、校歌だけは、大人になっても、覚えているんですよ。なぜか。6年間ずっと3年間ずっと歌っているから。これが手話でできれば同級生が満員電車の中で、手話と一緒に校歌を歌える。何かいろいろなことに結びついていくのかなと思って、これをぜひ下関市として取り組んでいけばいいんじゃないか。今、何校かでやってらっしゃるみたいですけど、もっともっと取り組むべきじゃないかなというふうに思いました。

それから、行政はサービス業なんで、お叱りを受けることが非常に多いと思います。でも、私は新地自治会長もやらせていただいてですね、高杉晋作の終焉の地の碑があるんですけど、経年劣化で説明文が読めなくなっていました。私が行った時に読めなくなってるんで教育委員会の文化財保護課の方に連絡すると濱崎課長が、定期的にやはりこういう文化財は定期的に巡回されて、もうそれに関しては、4月14日の晋作さんの命日までには修復するようにしていますというふうなことを言われて、すごく感動しましたし、地域の皆さんからも非常に感謝の声をいただきましたので、いつもサービス業でお叱りを受けているばかりじゃなくて、たまにお褒めをいただいたので皆さんにご披露しておこうかなと思いました。ありがとうございます。以上です。

前田晋太郎（市長）
市議会議員のときの唯一の仕事。公約でしたね。
ほかに何かありますか皆さん。

今日は、磯部教育長、畚野委員さんも初めての総合教育会議ということで、また何ヶ月後にありますけれども、とにかく課題はたくさんあるんですが、やはり、行政が先頭に立ってやっぱりやっ

かなくちゃいけないし、保護者の皆さんにも、やはりもうひと踏み込み、気づいてもらって、自分の手で子供たちはやはりもう1回見つめ直して頑張って育てていこうという気持ちにもなってもらわなくてはいけないし、そういう意味では我々が話したことをいろいろな形で、姿形を変えて、発信していくとか、政策として発信していく。すごく大切なことだと思います。教育委員の皆さんにもこれからご指導いただきまして、皆で子供たちを育てていきたいと思しますのでよろしくお願い致します。

以上で、総合教育会議を終了します。

(ありがとうございました。)

【閉会の宣告】

藤田信夫（教育部長）

ありがとうございました。以上をもちまして令和5年度第1回下関市総合教育会議を終了いたします。皆さま大変お疲れ様でした。